NC つれづれ草

森住　衛（桜美林大学）

A textbook is a textbook is a textbook.

最初から私的なことで恐縮だが，私の大学時代の恩師は江川泰一郎先生である。共通の趣味は将棋であった。その江川先生が，あるとき将棋を指しながら，ふと「森住くん，辞書と教科書には関係しない方がいいよ」とおっしゃった。「なぜですか」とお聞きすると，「細かいことが多くて，エネルギーを使うからね」とのお答えだった。

恩師のこの忠告にもかかわらず，私は辞書と教科書に関与してきた。特に，教科書とは，それも中学校の *NEW CROWN* とは，長い付き合いである。初版（1978 年版）の編集からなので，かれこれ 35 年になる。改めて思うに，教科書を通して生徒と「直接接触」できることが，私の英語教育研究に対する姿勢と合っていたからだろう。

教科書は，生徒たちの英語学習の拠り所の最たる教材である。教科書を通して，英語そのものだけでなく，英語に対する考え方，そして，言語観や異文化理解観を学ぶ。たとえば，「技能だけでなく伝える内容（題材）も大切にする」「英語教育が英米理解になってはいけない」「英語だけでなく他の言語にも目を向ける」等々，いろいろな「観」が教科書によって育まれる。これはとりわけ，自己や社会を意識し始める中学時代に顕著であると思われる。

このことを最初に感じたのは，大学で英語科教育法を担当し始めた頃である。受講生の言語観・文化観・世界観が大きく分かれているのが気になった。そこで，その違いの源をたどっていくと，大半が中学校の教科書に行き着いた。「教科書で知った」「教科書に書いてあった」などという返答が多いのである。3 年間読んだり写したりしていたら，影響を受けるのは当然である。まさに A textbook is a textbook is a textbook.（たかが教科書，されど教科書）である。教科書を編む側，選ぶ側の責任は重い。

齋藤榮二（京都外国語大学）

良い教科書を作ろう

「良い教科書を作ろう！」そのために全力を尽くしてきた。願いはただ一つ，「人の心の豊かさ，悲しさ，そして楽しさ，つらさを生き生きと表現している言葉は，世界中に存在している。そういう生きた人間の心のメッセージを生徒とともに探ろう」ということ。

私たちは，*NEW CROWN* で I have a dream. をとり上げる。キング牧師が，“Even if people hurts us, we must hurt no one. We must have the courage to refuse to fight back. We must use the weapon of love.” と語りかけるとき，この言葉こそ，まさに私たちの目の前にいる「キレル，ムカツク，ナイフを振りまわす」中学生に伝えるべきメッセージではないか。

Diminutive Giant と呼ばれる日本人がいる。「小さな巨人」。確かに 1 メートル 50 センチ台の小柄な女性。しかし，世界中を駆けめぐり，これほど多くの難民の命を救った人物はいないのではないか。その人の名は，緒方貞子。

“All the children in the world have their right to live with their families, the right to go to school in peace and the right to grow up in safety.”

中学生ともなれば，一人一人が発展途上にある可能性を秘めた知的存在だ。世の中のさまざまな現実を知り，その中に生きる存在としての自分自身のありようを考えはじめる年齢だ。彼らの成長を，英語の教科書を通して助けようではないか。

私たちは，実践的コミュニケーション能力を育てるべく，執筆陣，編集陣の総力を挙げて，そのための配慮を隅々にまで行きわたらせるよう努力した。

皆さん，この新しい *NEW CROWN* を通して，ともに教育の希望を語ろうではありませんか。